

## 「マレーシアの他教科教員を対象とした日本語教師養成プログラム」

国際交流基金日本語国際センター専任講師

根津 誠 Makoto\_Netsu@jpf.go.jp

マレーシア国際言語教員養成所 (IPBA) 講師

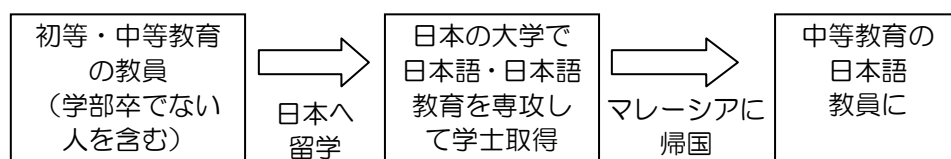
Ang Chooi Kean ackean05@gmail.com

キーワード: 中等教育の教員養成、日本語教師の専門能力開発、教育省支援

### 1. 背景

#### 1.1 マレーシア日本語教育略史 —中等教育を中心に—

- 1981年 ・マハティール政権が東方政策を発表
- 1982年 ・マラヤ大学日本留学予備教育課程開始  
(予備教育課程修了後にマレーシア国費で大学留学。理系中心)
- 1984年 ・全寮制中等学校の一部で日本語教育開始  
28校中6校で導入、青年海外協力隊隊員が教師として赴任
- 1990年 ・教育省によるマレーシア人教員養成開始



以後日本人教師からマレーシア人教師へ徐々に移行 (2001年までに)

- ・日本語教育実施校の増加 (2005年には43校)
  - 2004年 ・外国語教育新シラバス作成開始
  - 2005年 ・一般の中等教育機関 (デイスクール) の一部で日本語教育開始
  - ・タイの養成 (他教科教員の転向) をモデルに教育省の国際言語教員養成所 (IPBA) における国内初の日本語教員養成が開始
- ・ 2020年までに先進国入りを目指す
  - ・ テクノロジーと国際化を重視
  - ・ その一環として外国語教育を充実化

#### マレーシアの中等教育における日本語教員養成の現状

- ・ マレーシアの大学には日本語専攻コースが1つあるが教員を輩出していない
- ・ 大学、民間の教育機関も含めて国内の日本語教師養成プログラムはほとんどない
- ・ IPBA日本語教員養成開始以前は日本留学が唯一の中等教育の日本語教員養成

## 1.2 中等教育の新しい日本語シラバスの特長

- (1) 経緯 国際化の一環として外国語教育が拡大 → 新シラバス作成が決定  
2004年作成開始、2008年の1年生から順次施行（現在新旧が並行）  
新しく日本語を導入する一般の中等教育機関も新シラバスを使用
- (2) 学習期間 1～5年生の5年間（旧シラバス：1～4年生の4年間）
- (3) 目的 「自己開発と知識習得」「社会での相互関係の促進」のために  
「学習者が言語によるコミュニケーション能力を習得すること」
- (4) 到達目標  
日本語教育が終わった段階で、学習者は、以下のことができるようになる：
  - ① 日本語の文字（ひらがな、カタカナ、一定数の漢字）を、認識し、発音し、表記する
  - ② 簡単な日本語を聞き、応答する
  - ③ 簡単で適切な日本語を用いて、質問や応答、自己の考えを明確に表現する
  - ④ 簡単な日本語で書かれた様々なテキストを読み、理解する
  - ⑤ 簡単な日本語で、自分の考えを書いて表現する
  - ⑥ 日本語でのコミュニケーションを効果的に行うために、言語、非言語両面でのニュアンスを理解する
  - ⑦ 自身の文化と国家をよりよく理解、認識するために、マレーシアと日本の間の文化的な共通部分と差異を認識する
- (5) 言語使用の目的 「人間関係面（interpersonal）」、「情報面（informational）」、「芸術面（aesthetic）」の三分野
- (6) 学習成果  
シラバスの主要部分。(5)の言語使用の三つの分野の下に「learning outcomes」（学習成果、到達目標）および学年ごとにそれを詳細に表した「specifications」がある。4技能、文法知識、文字語彙などはそこに統合される形で扱われる。
- (7) 教育上の重点  
このほかに次の点も重視されている。「思考能力」「学習方法を学ぶ技術」「ICT」「多重知能」「価値観と公民教育」「知識の習得」「実社会への準備」
- (8) テーマ 自己・家族・友人・学校・地域社会・国
- (9) 評価の原則
  - シラバスの項目と目標に基づいて評価する
  - 形成的評価と総括的評価  
最終的な総括的評価よりも学習過程の形成的評価を重視  
手段の例として「Efolio、プロジェクト、グループワークなど」が挙げられている

## 2. 国際言語教員養成所（IPBA）における日本語教師養成プログラムの概要

### 2.1 実施機関

教育省 国際言語教員養成所

(Institut Perguruan Bahasa-bahasa Antarabangsa, マレー語略称 IPBA)

教育省学校局教師教育課所管の養成機関

国際交流基金クアラルンプール日本文化センター(JFKL)が協力

### 2.2 参加者

中等教育機関で数学や科学や技術家庭など日本語以外の科目を専門とする現職教員（全員が学士卒、教員資格あり）

### 2.3 コース予定

- 中心である 1 年コースは 2006 年 1 月開始

	12 週コース (予備コース)	1 年コース (TJFL コース)	インターンシップ (フォローアップ)	訪日研修 (2 ヶ月)
第 1 期	2005	2006	2007	2008
第 2 期	2006	2007	2008	2009
第 3 期	2007	2008	2009	2010
第 4 期	2008	2009	2010	2011
第 5 期	2009	2010	2011	2012

- 定員 15 名×5 年間計画
- フランス語、ドイツ語のコースもほぼ同時期に開設（プログラム構成は異なる）。それぞれフランス大使館、ゲーテ・インスティテュートが協力し、運用力育成部分は主に当該国で行う

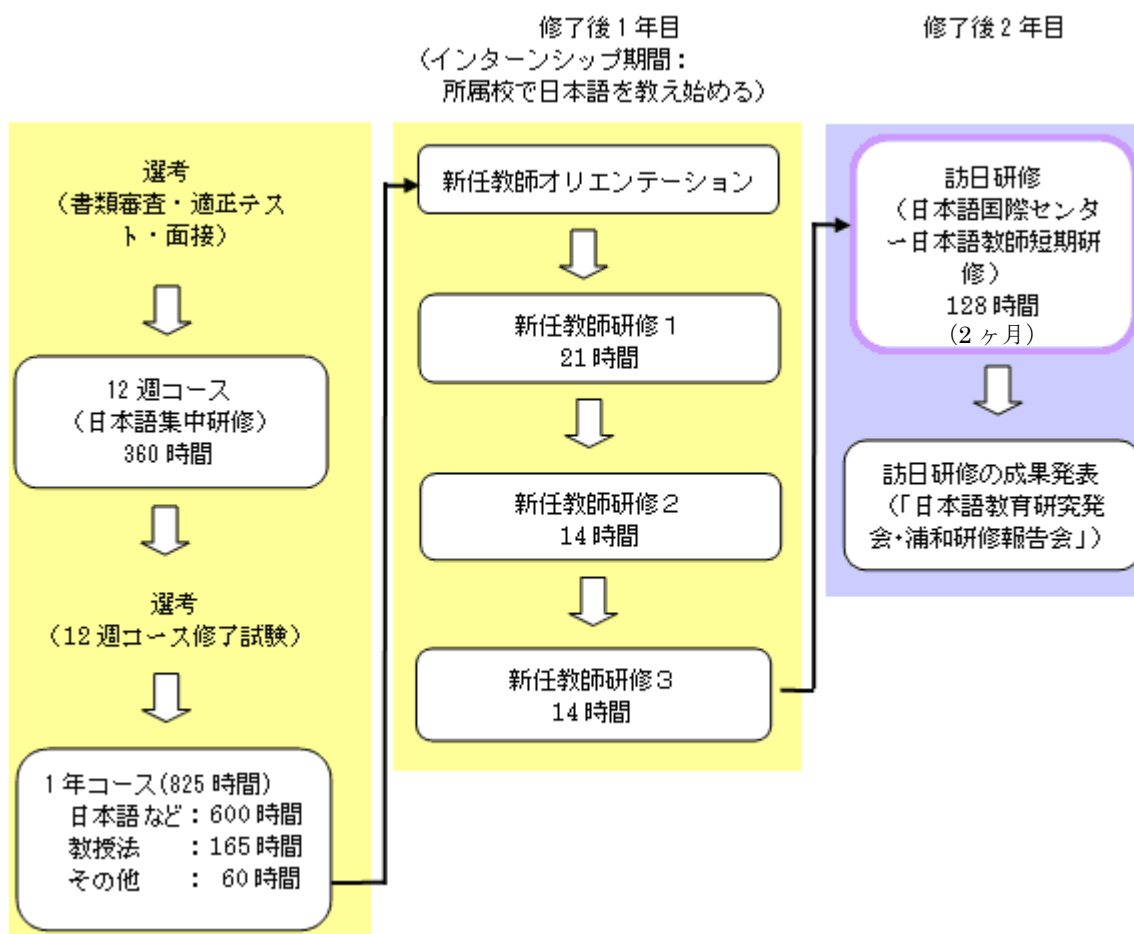
### 2.4 教員養成の構成

プログラムの全体は次の要素から成る

- (1) 12 週の予備コース：日本語の基礎力を養成する
- (2) 1 年間の Teaching of Japanese as a Foreign Language (TJFL) コース：初中級の日本語の能力とともに日本語の教授能力の養成を目指す
- (3) 1 年間のインターンシップ・プログラム：1 年コース終了後に配属された学校で日本語を教えながら、さらに日本語力と教授能力の向上を目指すと同時に、修了者の所属校における日本語教授の支援も行う
- (4) 日本での現職日本語教師訪日研修：国際交流基金日本語国際センターでの 2 ヶ月の短期研修。日本語、教授法、文化体験など（帰国後に成果報告）

全体の流れは図表 1 を参照

<図表 1> 全体の流れ



## 2.5 担当講師 (2008 年 4 月現在)

- (1) マレーシア人教師 3 名、日本人教師 1 名 (教育省が雇用)
- (2) 教授法はマレーシア人教師、日本語はマレーシア人教師と日本人教師が担当。  
中級レベルの日本語は日本人教師が主担当
- (3) 国際交流基金クアラルンプール日本文化センター講師 (日本語教育専門家) が協力
  - (ア) 立ち上げ時にはシラバス (教育省 2006)、カリキュラム作成に参加
  - (イ) 初年度は中級および技能別日本語授業の一部科目を担当し、授業モデルを提示
  - (ウ) 第 2 期からはコンサルティング業務およびテストについての協力 (テスト問題の事前確認と、テスト後には評価方法が適切だったかどうかのチェック)

## 2.6 IPBA 1 年コース (TJFL コース) シラバスに記載された目標 (教育省 2006)

- (1) マレーシアの学校における外国語科目としての日本語を教える教師として必要な言語能力とコミュニケーション能力のレベルでの日本語を使う
- (2) 教室内で適切な学習体験が起きるよう計画、実施し、また教室実践を批判的に内省するための、十分な教科知識、教授能力、および技術的な能力を身につける
- (3) 教育、および情報技術 (IT) の新しい発展に伴い、自己開発と専門能力開発を目指す

- (4) マレーシアの学校の生徒の日本語学習を促進するために日本語教師が直面する問題について批判的に内省する
- (5) 自己開発のため、またコース参加者間および自分の生徒達の異文化間の気づきを促進するために、選択された分野の日本文化について理解を深め、技術を習得する

## 2.7 1 年コース作成時に盛り込まれた日本語教師の専門能力

実施機関、時間数、講師のマンパワーなどの大枠が決まった段階で、2006 年の 1 年コースのカリキュラムを作成した際に、他教科の教員が見につけるべき専門能力として次の内容を想定した。

- (1) 日本語：言語の知識と運用力、分析能力
  - (ア) 正確な初級日本語の運用力  
学習者に良質なインプットを十分に与えることができる。  
(学習者の旧シラバスは JLPT4 級程度、新シラバスは 3 級項目の一部を含む)
  - (イ) 中級以上の日本語運用力  
常に新しい情報を仕入れて理解し加工することで学習者の学習リソースを豊かにする。また日本人との接触場面を有効に活用できることも必要。
  - (ウ) シラバスで扱われる初級日本語に関する言語学的知識  
母語との比較、学習者の誤用の分析などを含む。
- (2) 教授法：言語学習と教授に関する知識と能力  
コース参加以前に外国語教育経験がない教員も多い。また学習者中心など比較的新しい概念の導入も必要。
- (3) 文化：異文化理解、目標文化などに関する知識と能力  
日本文化に関する知識、多様性の認識、異文化理解能力を育成するための知識など。

## 2.8 カリキュラム

カリキュラムは図表 2、1 年コースのカリキュラム構成は資料 1 を参照

<図表 2> コース別学習目標・カリキュラム・使用教材

プログラム	期間	学習目標	カリキュラム
予備コース (12 週コース)	12 週 (9 月～11 月)	基礎日本語能力 (JLPT4 級～3 級) をつけ、日本の伝統的な文化を知り、体験する	日本語 (300 時間) 使用教材: 『みんなの日本語』 (第 1 課～40 課) 文化知識・体験
TJFL コース (1 年コース)	1 年間 (1 月～12 月)	中級前半レベル (JLPT3 級以上 2 級未満) の日本語能力と、初級向けの教授法を身につける。また、日本文化を通して異文化理解を授業に取り入れる方法を考える。	日本語 (540 時間) 使用教材: 『みんなの日本語』 (第 41 課～50 課)、 『日本語集中トレーニング』他 教授法と評価 (165 時間) 実習: 4 週 文化知識・体験 異文化理解・コミュニケーション (30 時間)・第二言語習得 (30 時間) 日本語学 (30 時間)
インターンシップ・ プログラム	1 年間 (1 月～12 月)	1 年コースで身につけた日本語を基礎に、仕事に直結した場面、話題の日本語力を向上させる。 日本語教師であるとともに自律的な日本語の学習者かつ問題解決能力と改善していく力を持つ日本語教育の実践家になる。	日本語能力の上達 (Language Enrichment Component) 専門性・実践力の向上 (Professional Development Component)

### 3. コースの実施状況と課題

#### 3.1 コース修了状況

各期の 1 年コース修了者数

第 1 期 12 名 (うち 10 名が 2008 年 5、6 月に訪日研修に参加)

第 2 期 9 名

第 3 期 10 名

#### 3.2 中等教育における日本語教員のバックグラウンドの多様化

- 日本語運用力と日本に関する知識・経験で勝る留学経験者
- 最新のマレーシア教育事情に即した養成カリキュラムで学んだ IPBA 修了者  
(研修会で、新シラバスの Learning Outcome に基づく教案作成活動を行ったところ、十分な活躍を見せた)
- IPBA 修了者への支援の必要性
- 現職者支援が複雑化

#### 3.3 第 1 期、第 2 期のコースの課題と改善の試み

##### (1) 学習目標の Can-do 記述 (CDS) の形による明文化

日本語力を例に取ると、中等教育の日本語教師として、具体的にどの場面で何がどの程度できるようになればよいのかという目標が、CDS の形で明文化されていなかった。

##### (2) 講師間での目標の共有

マレーシア人、日本人、また中等教育の現場の経験の有無など、バックグラウンドが異なる講師の間で、目標の認識にずれがあったが、それを議論するための記述が不十分だ

った。

(3) 学習者であるコース参加者との目標の共有

コース参加者が1年コース終了時に「自分自身の日本語力の十分な点、不十分な点」について振り返った記述を見ると、運用力の記述や目標について漠然と捉えており、初級日本語の正確な理解と使用など職務上必要なものと、テレビドラマの日本語をすべて聞き取るなど必要性の低いものの優先付けができていないケースが多く見られた。

→こうした状況を受け、第2期1年コース終了のころから、講師間や派遣専門家との間でCDSに関する話し合いが持たれるようになった。

(4) 内省的実践のツールとしてのポートフォリオの改善へ

2.6 (2)にあるようにIPBA1年コースのシラバス(教育省2006)には内省的実践の必要性が重視されており、第1期から12週コース中のカルチャーポートフォリオ(文化理解)、1年コースの教授法授業および実習中のティーチングポートフォリオ(教授能力)などにより内省をうながしていたが、第3期以降、自己評価の意義についてのコース参加者自身の認識の改善、またラーニングポートフォリオ(日本語学習)の改善に力を入れている(各ポートフォリオの詳細は分科会発表内容を参照)。

参考文献

鐘ヶ江弓子(2003)「マレーシアの教育政策と学校教育制度」『共栄大学研究論集』創刊号  
共栄大学

楠元貴久(2004)『マレーシア国全寮制中等教育機関日本語教育20年の歩み』

国際交流基金「世界の日本語教育の現場から ～日本語教育専門家・ジュニア専門家の声～」  
2008年度マレーシア報告<<http://www.jpjf.go.jp/j/japanese/dispatch/voice/>>  
2008年12月1日参照

久保田竜子(2003)「アメリカ初等中等外国語教員養成プログラムの国家基準と日本語教育—NCATE 標準—」『日本語教師の専門能力開発—アメリカの現状と日本への提言—』  
日本語教育学会

マレーシア教育省(2006)“One-Year Teaching Japanese As A Foreign Language  
—Course Syllabus—” マレーシア教育省 学校局教師教育課

マレーシア教育省(草稿)“The Malaysian National Syllabus for Secondary school  
—Japanese Language—“ マレーシア教育省 カリキュラム開発センター

資料1 (次ページ) IPBA1年コース カリキュラム構成 抜粋和訳



資料1 IPBA1年コース カリキュラム構成 抜粋和訳

(表内の「ペーパー」は大きな科目に相当するもの)

構成要素と科目		単位数
A.	教授理論／言語と学習 ペーパー 1: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 第二言語習得論                             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 第二言語習得理論入門</li> <li>- 現行のESLなどのシラバスの概観</li> <li>- 第二言語習得理論の諸問題</li> </ul> </li> </ul>	2
B.	日本語教授法 ペーパー 2: <ul style="list-style-type: none"> <li>● シラバス分析</li> <li>● 教科書分析</li> </ul> ペーパー 3: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 言語技能と文法の教え方</li> </ul> ペーパー 4: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 教案の作り方</li> <li>● 教材作成</li> <li>● 授業の実施</li> <li>● 模擬授業</li> </ul> ペーパー 5: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 評価とテスト</li> </ul>	11
C.	日本語 ペーパー 6: <ul style="list-style-type: none"> <li>● 言語能力                             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 聴解・口頭表現</li> <li>- 読解</li> <li>- 文章表現</li> </ul> </li> </ul> ペーパー 7: <ul style="list-style-type: none"> <li>- 日本語研究</li> </ul> ペーパー 8: 異文化コミュニケーション	40
D.	実地体験 <ul style="list-style-type: none"> <li>● 職務的体験                             <ul style="list-style-type: none"> <li>- 発展的プログラム</li> <li>- 実習／教育現場体験</li> </ul> </li> <li>● 文化体験 (教室外学習)</li> </ul>	2
合計		55

出所：マレーシア教育省（2006）